

『源氏物語』の表現世界——『うつほ物語』のかなたへ

小嶋 菜温子

『源氏物語』の世界は、読めば読むほど奥が深い。先行する物語や漢詩・和歌・歌謡などを効果的に血肉化しつつ、独自の表現世界が形成されており、読む側をしてその重層的な言葉の森のなかにさ迷わせる——それがこの作品の醍醐味であるということもできよう。

梅枝巻にみえる「火取（ひとり）」「鉄臼（かなうす）」という言葉葉にまつわって、別に論じたことだが、『うつほ物語』の世界との交差も注目される。（詳しくは、拙稿「光源氏体制とは何であったか——『うつほ物語』の産養からみる、梅枝・藤裏葉・若菜上巻」新時代への源氏学」3、竹林舎、二〇一五年に拠りたい）。以下に、すこしだけ前稿を振り返っておく。

「火取」は、薫物のための小道具だ。梅枝巻の巻頭は、華やかな薫物（たきもの）合わせへの期待で幕があげられた。光源氏が六条院の女君たち（紫の上、明石の君・花散里など）に、薫物合わせのための準備を依頼する場面。

香どもは、昔今の取り並べさせたまひて、御方々に配りたまつらせたまふ。「二種づつ合わせさせたまへ」と、聞こえさせたまへり。贈り物、上達部の祿など、世になきさまに、内にも外にも事しげく営みたまふにそへて、方々に選りとのへて、**鉄臼**の音かしがましきころなり。

（梅枝 三九六頁。小学館・全集本による。以下同じ）
光源氏が主導する形で、六条院の内外では明石の姫君の裳着にむけて、「贈り物」や「祿」の準備で大賑わいである。それに加えて今、女君たちそれぞれの居所では、光源氏の要請に応じて薫物の調合が始められ「鉄臼」の音でかまひす、この「鉄臼」も諸注が言うとおり、薫物の調合のために用いる用具のこと。

「火取」は、明石の姫君の裳着のために光源氏が準備した調度品の中にも見える。

御調度どもも、そこらのきよらを尽くしたまへる中にも、香

壺の御箱どものやう、壺の姿、**火取**の心ばへも目馴れぬさまに、今めかしう、やう変へさせたまへるに、所どころの心を尽くしたまへらむ匂ひどもの、すぐれたらむどもを、嗅ぎ合はせて入れんと思すなりけり。

(梅枝、三九七)

美麗を尽くした「香壺の御箱」や「壺」。それらに交つて、「火取」はやや地味な存在といえようか。

しかし「火取」といえば、忌まわしい記憶も蘇る。梅枝巻の前段、真木柱巻に語られた、髭黒とその北の方とのあいだの夫婦喧嘩の際に、北の方が夫に向かつて「火取」の灰をぶちまけた場面がそれであつた。あの忌まわしい場面とはうつつかわつて、梅枝巻の「火取」は豪華な道具立ての一つとして焦点化されるのは、実に対照的だ。「火取」はそのほかでは、鈴虫巻に描かれるのみである。

そして女君たちに依頼しておいた薫物が光源氏のもとで披露される、薫物合わせの日。

「これかれ分かせたまへ。誰にか見せん」と聞こえたまひて、**御火取**ども召して試みさせたまふ。「知る人にもあらずや」と卑下したまへど、言ひ知らぬ匂ひどもの、進み、後れたる、

香一種などが、いささかの咎をわきて、あながちに劣りまさりのけぢめをおきたまふ。

(梅枝、四〇〇)

いよいよ、先に光源氏が準備した「火取」の出番である。判者として呼ばれた蜜兵部卿は謙遜しつつも、女君たちから届けられた種々の薫物を的確に嗅ぎ分けて判じる。光源氏の六条院が、典雅な文化的空間として評されるとおりである(河添房江「梅枝巻と唐物——メディアとしての薫者と手本」(「源氏物語時空論」東京大学出版会、二〇〇五年)。

東宮への入内を控えての、姫君の装着を華麗に演出するための薫物合わせ。そして、そこでの重要な調度品——梅枝巻の「火取」のあなたには、皇子誕生から産養という、「光源氏体制」の総仕上げの光景が遠望されてしかるべきなのかもしれない。ここで参照されるのが、『うつほ物語』であつた。

『うつほ物語』においてすでに、重要な局面において「火取」が登場していた。なかでも注目されるのは、物語終盤の山場である、いぬ宮の産養の場面での例であつた。女一宮(朱雀帝の皇女)を母とするいぬ宮の誕生は、俊蔭一族の琴の相伝を完成する契機に違いない。左は、いぬ宮のための産養記事である。

*衣^{ふく}丁子・**鉄臼**に入れて搗^うかせ給ふ。練り絹を、綿入れて、袋に縫はせ給ひつつ、一袋づつ入れて、問ごとに、御簾に添へて懸けさせ給ひて、大いなる白銀の狛犬四つに、腹に、同

じ「薰炉」据えて、香の合わせの薫物絶えず薫^たきて、御帳の隅々に据ゑたり。廂のわたりには、大いなる「薰炉」に、よきほどに埋みて、よき沈・合はせ薫物、多く焼べて、籠覆ひつつ、あまた据ゑわたしたり。御帳の帷子・壁代などは、よき移しどもに入れ染めたれば、そのおとどのあたりは、よそにても、いと香ばし。まして、内には、さらにも言はず。しるしばかりうちほのめく蒜の香などは、ことにもあらず。

（蔵開・上、四八〇—四八一）

いぬ宮の産養の重要性については、室城秀之氏が詳細に論じるとおりだ（室城秀之「蔵開・上のいぬ宮の産養関係事をめぐって」『うつほ物語の表現と論理』若草書房、一九九六年。小嶋「『うつほ物語』いぬ宮の産養と「鶴」「鯉」『源氏物語の性と生誕王朝文化史論』立教大学出版会、二〇〇四年）。この重要な場面において、「薰炉（火取）」さらには「鉄臼」に光が当てられることに注意すべきだろう（「鉄臼」という言葉が『源氏物語』のなかで出てくるのは、冒頭で引用した梅枝巻の一例だけ）。

こうした『うつほ物語』の展開を遠景に置くならば、明石の姫君の裳着に先立つ薫物合わせのための「火取」「鉄臼」には、きたるべき明石姫君の皇子誕生そして産養を予見させてしかるべきである。

ところが『源氏物語』は、明石姫君の皇子誕生から産養を語る若

葉上巻にいたると、『うつほ物語』の産養でみられたような薫物のシーンは省かれる。それゆえに、「火取」「鉄臼」が再度登場することもないままに終わるのだ。

これについては、明石一族の〈血の劣り〉の問題が介在しているだろう。裳着以前の姫君のための儀式は、極力控え気味に描かれてきたが、皇子のための産養は一段と盛儀^{さか}ぶりが強調される。しかしその盛儀は華麗な王朝風俗の装いを取るのではなく、あくまで公式的な儀式次第に沿って肅々と語られるのである。『源氏物語』の表現世界において、明石一族の〈血の劣り〉が巧みに隠蔽され、克服されていくその機微を、ここに看取することができる（阿部秋生『源氏物語研究序説』東京大学出版会、一九六〇年。小嶋「明石とかぐや姫」〔『源氏物語批評』有精堂出版、一九九五年〕、同「語られない産養——明石姫君の五十日・袴着・裳着、そして立后」〔『源氏物語の性と生誕』前掲〕）。

父・桐壺帝の寵愛を一身に受けた第二皇子、光る君。悲劇の皇子であった主人公の光源氏は、砂上の楼閣のごとき王国・六条院に生きた（小嶋「六条院と女楽」〔『源氏物語批評』〕、同「光源氏の〈家〉と〈血〉の閉塞——横笛・鈴虫巻の月と音楽」〔『源氏物語の性と生誕』前掲〕）。その砂上の時空の柱の一つであった明石一族の物語が、『うつほ物語』の表現世界のかたに存立しえていたことに注意したい。